

目撃者なし

● ホワイトカラー殺人事件

樹下 太郎



ポケット・ライブラリ

目撃者なし

著者 樹下太郎

発行者 佐藤亮

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町71番地
電話東京(341) 7111—9番
振替東京808番

印刷所 株式会社金羊社

製本所 新宿加藤製本所

定価 170円

1961年6月5日 印刷

1961年6月10日 発行

乱丁、落丁本は本社又は
お買求めの書店にて
お取替えいたします。

樹 下 太 郎

目 撃 者 な し

ポケット・ライブラリ

10

新 潮 社 版

目次

第一部	夫		七
第二部	妻		九
第三部	夫		一七
第四部	妻		二五

目撃者なし

Ⅱ ホワイトカラー殺人事件 Ⅱ

第一部 夫

1

販売部は、都内、地方、貿易、事務、の四つの課にわかれていた。

昭和三十年に入社して以来、私はずっと都内課のセールスマンをやっていたのだが、昨年（昭和三十四年）の春、或る事情で、事務課に転じた。会社に二十万円からの損失を与えてしまったのだから、本来なら辞表を提出すべきところなのだが、部長の本堂明彦が必死に私を庇ってくれたので、配置換えですんだというわけだ。事務課での私の仕事はひどく無味乾燥であったが、そんなわけで、私は決して不平を言うわけにはいかなかったし、また言うてはならないのだと自身を厳しく戒めてもいる。

その日、五月十三日、五時から来月の販売予定修正会議があることになっていたので、その資料をひと通り揃えるために私は朝から忙しい思いをしていた。

四時近く、やっと目鼻がついて、一服していると、電話器のベルが鳴った。上目黒の須藤

外科病院さんからです、と、交換手という。

「おれ宛てにか？」

「そうです。ではつなぎますから」

電話の向うに出たのは、訛りのあるふとい胴間声であつた。

「水品みずしなしょうさく尚策さんですな」

「そうですか」

「水品しのぶさんというのはあなたの奥さんですな？」

と、その男はおかしな念の押し方をして、私がそうだと答えると、

「わしは目黒警察署の交通係のものです」

「とおっしゃると？」

「実はあなたの奥さんが交通事故にあわれましてな。——いや、いや、傷は大したことはな
いからご安心下さい。かるい脳震盪をおこしたほかは、左腕に全治一週間程度の打撲傷を負
った程度なのです。一応、ぶつかった車でこちらの病院に収容しましたからご承知置き下さ
い。では、病院のひとつかわります」

女の声がかわりに出た。患者の肌着と寝衣を持ってきてほしいということであつた。

私は、病院の位置を訊いてから、もう一度交通係の巡査に電話口に出てもらい、事故の概

要を訊ねた。

時刻は午後三時二十五分頃。場所は目黒区上目黒八丁目の三叉路付近。交通信号は「注意」の色を点滅させていただけだという。しのぶは横断歩道の上で中型ライトバンにはねられたのだが、運転手や目撃者の証言では、彼女はほとんど車の姿など眼中にないかのような無鉄砲な横断の仕方だったという。

「なにかひどく急いでいる様子だったらしいですな」

と、巡査はつけ加えた。

資料の揃え方、綴じ方を女の子に教えてから、課長の工藤に早退を申し出た。タクシーを拾って、自宅へ走らせた。私の住居は、小石川、小日向水道町にあるのだ。

（しのぶはどうしてそんな所へ出掛けたんだろう……）

結婚して一年と少しになるが、目黒方面に彼女の知合いがあることなど一度も耳にしたことがない。

石切橋からさらに川添いに少し行って右側へ折れたところに私の住居があった。タクシーを降りてから細い道を百メートルばかり歩かなければならない。

二軒長屋のうちの一軒で、四畳半、六畳とやや広い縁側がある。

玄関も裏口の戸もびったり閉ざされていて、私はふと拒否されているかのような冷たさを

感じた。

矢車がからからと乾いた音をたてていた。隣家では、節句が終ったというのに、いまだに鯉のぼりの柱を矢車をつけたまま片付けずにいるのだ。

簞笥の中をあちこちかき廻して、妻の肌着と寝衣用の浴衣、タオルなどをやっと揃えろと、風呂敷に包んだ。隣家の主婦に留守にするからよろしくと頼み、待たせて置いたタクシ―に乗込んだ。

今朝出がけに、しのぶは午後実家へ行ってくるからと、私に断っている。嘘ではないのか。しのぶの実家は浅草北清島町にあるのだ。実家へ寄ったら、急に日黒へゆく用事が出来たともいうのだろうか。

が、私はあまりそのことについて考えたり疑惑を抱いたりすまいと思った。しのぶと会えばわかることなのだから。

いったん渋谷駅前に出てから、広い通りを西南に向った。

「女房が車にはねられてねえ……」

運転手にそう話しかけたのは、ひとりで心配しているのが、なんとなく心細くなったからである。

「そりゃあいけませんね。場所はどこです？」

「上目黒の三叉路だというんだがね。ぼくはこっちの方面はあまり詳しくないからはっきりわからないんだ……」

山手線の内側なら、商売柄よく知っていた。それでなくても、東京で生れ、東京で育っているのである。渋谷、目黒、世田谷となると、殆んど縁がなかった。

広い快適な道路だった。中途から玉川電車のレールが路上に現われた。

「此処じゃないですか」

車が徐行した。

「あの白墨でしるしのつけてある処ですよ」

直径一メートル程の円がアスファルトの上に白く描かれていた。しのぶの倒れた場所なのだろう。少し先の細長い印の中には、車が急ブレーキでスリッパした跡がなまなましく印象されていた。

「大したお怪我じゃなさそうですよ」

印のしてあるところで停ってちょっと見てから、運転手が言った。慰めるというより、商売の勘でわかるらしく、確信のある言い方だった。

病院はすぐ分った。

小さな、陰気くさい木造二階建であった。

一坪半程の狭い個室のベッドにしのぶは寝かされていた。首だけ壁の方に向けている。

もともと白い顔が血の氣を失って、まるで青いドーランを塗ったようであった。シヨックからまだ醒めきっていないのだろう。

首をゆっくり上に向けると、空虚なまなざしで私に視線をあわせた。

「どうしたんだ、いったい？」

つとめて、やさしく言った。

しのぶはいまにも泣きそうな微笑をうかべて、すみません、と口の中で呟いた。

「でも、大したことじゃなくて何よりだったよ」

そんな妻を責める氣になれなかったのだ。

しのぶはいきなり毛布を額の上まで引張りあげた。間もなく嗚咽しているらしい肩の動きが毛布の上から見えた。小刻みに慄えているのは、声を必死におし殺しているからだろう。

妻に暗い秘密があるらしいことを、私は、一瞬、直感的に——皮膚で気温を感じるような感じ方でさとった。しかし、健康を恢復するまで追及するのはよそうと考えた。しのぶは負傷よりも精神の方でより痛めつけられているにちがいないからだ。

……愛していた。愛しているだけに嫉妬もはげしく燃えあがるのである。

私は三十八歳。しのぶは十歳も年下の若妻であつた。美しさでも目立つ女なのだ。美しいとあからさまに言うのは、その美しさが、さらに私の嫉妬を烈しいものに行っているということを言いたいからである。

妻が秘密を打明ける日までの地獄のような苦しみを予想して、私は暗然とした。しかも打明けられたあと、それ以上の苦しみを味わわされることになるかも知れないのである。

私はピースに火をつけると窓際へ行つた。

ぼんやり佇んで、外を眺めた。

窓は、窓の用をほとんど果していなかった。メートル先は雨露と埃を吸い込んだ板塀で、塀に接して隣の三階建のビルが視野を全く塞いでしまっている。一日中陽が当りそうにもない裏庭——というより空地には、大きな八つ手が一本葉をしげらせているだけであつた。

「冬のような庭だな」

感慨がふと口をついて出た。そのときしのぶの泣きやんだ気配がした。

案内しただけで姿を消した看護婦が、再び病室へ入ってきた。背の低い顔色の悪い女である。

「着換えをお持ちになりましたか？」

「これです」

風呂敷包みを差出すと、

「奥さん、着換えを致しましょう」

「あとで……」

しのぶは、瞬間、含羞をあらわにして答えた。眼のふちがあかくなっている。泣いたあとの表情は色情的ですらあった。

「だって、汚れてますわよ。それに旦那さんにはこれから事務室に行っていただかなくてはなりませんから、その間にでも——」

「しのぶ、そうした方がいいよ」

言い残して、私は病室を出た。

事務室で手続きを済ませ、医師に容態を聞いてから病室へ戻ると、ちょうど着換えをすませたところであつた。しのぶは床の上へ自分ひとりの力で立って前を合わせており、医師の言う通り軽傷であるのを確かめることが出来た。

チュニツクコートは掛布団の上に着せかけてあつた。裾の方に二十センチ程の長さで刃物に切られたようなかたちで黒く汚れていた。タイヤに引きずられたあとなのか。

「今晚は付添っていたいと思うんですがね」

看護婦に言うと、無理にとおっしゃるなら別ですが、傷も大したことはないし、室もこの通り狭いから——と、つつけんどんな断り方をされてしまった。

「居て下さらなくても大丈夫よ」

しのぶも脇から言葉を添えるので、私は泊ることを断念した。もつとも、一晚中しのぶを眺めているのが、却って辛いような気もするのだ。無性に酒を飲みたくなってもいた。

「それじゃあ、もう少しいて帰ることにしようか」

私は腰掛に腰をおろした。

「では、これを——」

看護婦は出がけに風呂敷包みを私に渡そうとした。しのぶの脱いだ衣類がはいっているのだろう。

「あッ」と、そのとき、しのぶは悲鳴に近い声をたてた。「それはあたしが退院するとき持って行くからいいですわ」

「なあに、どうせ手ぶらなんだから」

「いいえ、いいのよ。ほんとに置いてって」

必死とも受取れる表情だった。しのぶは羞かしがり屋なのだ。夫にも肌着を見られたくないのだろう。頬に紅みがさしていて、若い娘のような初々^{ういうい}しさに溢れていた。二十八歳の人